論文：

ウオーム・リバーを渡るということ

松田　理
山口県立大学国際文化学部　教授

Crossing Warm River

Osamu MATSUDA
Professor, Yamaguchi Prefectural University

Abstract

Warm River is a short story written by Erskine Caldwell. In this story Richard's values change dramatically after crossing Warm River. This paper examined the meaning of crossing Warm River and the meaning of this short story in the 21st century. It also might show the abortiveness of so-called globalization.

『ウオーム・リバー』はアースキン・コールドウェルが1932年に発表した短編小説である。この作品では、山国の恋人を訪ねる若者リチャードのわずか半日の体験が一人称で語られる。作品のタイトルともなっているウオーム・リバーそのものが、またその川を渡ることがこの作品においていかなる意味を持ちうるのかを探ってみたい。

The driver stopped at the suspended footbridge and pointed out to me the house across the river. I paid him the quarter fare for the ride from the station two miles away and stepped from the car. After he had gone I was alone with the chill night and the star-pointed lights twinkling in the valley and the broad green river flowing warm below me. All around me the mountains rose like black clouds in the night, and only by looking straight heavenward could I see anything of the dim afterglow of sunset. (p.1)

運転手は細い吊り橋のたもとで車を止め、川向うのその家を私に指示してくれた。私は2マイル離れた駅からの乗車賃25セントを払うと車から降りた。運転手が行ってしまうと私は身を切るような闇の中に取り残され、谷間には星型の灯りが点々とゆらめき、眼下には大きな緑の川が温かく流れていた。私の四方には闇の中の黒雲のように山々がそびえ、天を仰ぐとやっとかすかな夕焼けの名残らしきものが見えた。

（筆者訳）

この作品の舞台となる峡谷は四方を切り立った山々に囲まれ、谷底には大きな温かい緑の川が流れており、リチャードの恋人グレチェンの住む世界は川の対岸にある。対岸とこちらの世界を結ぶのは細い吊り橋だけである。寒気の中で温かい川から立ち上る湯けむりに対岸の家々の灯はゆらめき、この世の光景とも思えぬほど幻想的である。この時点で既に、非凡な温かい川が境界となり、川向うの世界がリチャードの住む世界とは異なることが暗示されている。

The creaking footbridge swayed with the rhythm of my stride and the momentum of its swing soon overcame my pace. Only by walking faster and faster could I cling to the pendulum as it swung in its wide arc over the river. When at last I could see the other side, where the mountain came down abruptly and slid under the warm water, I gripped my handbag tighter and ran with all my might. (p.1)

きしむ吊り橋は私の歩調に合わせて揺れ、その揺

れの勢いが間もなく私の歩調を乱した。次第に足を速めてやっと、川の上で大きな弧を描いて揺れる吊り橋から、私はどうにか落ちずにいることができた。ついに橋の向こう側が見えた時、そこでは切り立った山肌が温かい水に突き刺さっていたが、私はハンドバッグをしっかり握りしめると全力で走った。

（筆者訳）

吊り橋がリチャードの歩調に合わせて揺れ、やがて歩調を乱されるとは意味深長である。確かに吊り橋状の物は歩行者の歩調によって次第にうねりを生じる。そして、そのうねりに足をとられることがある。吊り橋はリチャードが対岸に渡ることを拒んでいるようにも見えるが、もちろん吊り橋そのものに意思はなく、歩調を乱す揺れを生じさせたのはリチャード自身の歩調である。こう考えると、リチャードが対岸に渡ること、すなわち異なる価値観の世界にはいることを拒むのは、リチャード自身の価値観であることが暗示されていると言える。また、吊り橋は大きな弧を描いて揺れると表現されているが、それは横揺れを意味することになる。しかし、実際に歩行によって生じる揺れはうねりを伴う縦揺れとなるはずで、この部分は作家の筆に弾みがつきすぎたせいなのであろう。

“Did the footbridge frighten you, Richard?” she asked excitedly, holding my arm with both of her hands and guiding me up the path to the house.

“I think it did, Gretchen,” I said; “but I hope I outran it.”

“Everyone tries to do that at first, but after going over it once, it’s like walking a tightrope. I used to walk tightropes when I was small—didn’t you do that, too, Richard? We had a rope stretched across the floor of our barn to practice on.”

“I did, too, but it’s been so long ago I’ve forgotten how to do it now.” (p.2)

「吊り橋は怖かったかしら、リチャード」と彼女は息をはずませて尋ね、両手で私の腕をとると坂道をのぼり家まで案内してくれた。「確かに怖かったよ、グレチエン」と私は言った。「でも、負けずに走り抜けてやったつもりだ。」

「みんな最初はそうしようとするけど、一度渡ってしまえば綱渡りみたいなものよ。私は子どもの頃よく綱渡りをやったわ ― あなたもやらなかったかしら、リチャード。 私たち、納屋の床の上に練習用のロープを張ってもらってたの。」

「僕もやったけど、ずいぶん昔のことだからもうやりかたを忘れてしまったよ。」

（筆者訳）

左右に倒れる（転落する）恐れのある不安定な足場を進むには、恐怖を抑えて走るほうが体が左右に倒れにくいのは事実だが、それは粗野な力技ともいうべき方法である。リチャードは、子どもの頃にはできた綱渡りの感覚をすでに忘れているのである。それは子どもの頃に持っていたはずの価値観を見失っていることを意味し、やがてグレチエンがそのことに気付かせてくれることをも暗示している。

He laughed at me for being afraid of the river.

“You wouldn’t have minded it. The river is warm. Even in winter, when there is ice and snow underfoot, the river is as warm as a comfortable room. All of us here love the water down there.”

“No Richard, you wouldn’t have fallen in,” Gretchen said, laying her hand in mine. “I saw you the moment you got out of the hack, and if you had gone a step in the wrong direction, I was ready to run to you.” (p.3-4)

彼は川を怖がる私を笑った。

「落ちても、何ともなかったさ。あの川は温かいんだ。冬に、足元に雪と氷がある時でも、あの川は暖房のきいた部屋のように温かいんだ。ここに住む者はみんな下のあの川が好きなんだよ。」

「いいえリチャード、あなたが川に落ちることはなかったはずよ」とグレチエンは私の手に自分の手を重ねて言った。「あなたがタクシーから降りた瞬間、姿が見えたのよ。だからあなたが一歩でも間違った方向に行けば、あなたのそばに駆けてゆくつもりだったわ。」

（筆者訳）

リチャードにとっては恐怖の対象である川が、そこに住む人々のとっては愛の対象であることからも、そこがリチャードにとっては異質の価値観を持つ世界だとわかる。またこの部分でも、グレチエンの言葉から、彼女がリチャードの過ちを正す役割を担っていることがわかる。

I walked back into the room and closed the door and bathed my face and hands, scrubbing the train dust with brush and soap. There was a row of hand-embroidered towels on the rack, and I took one and dried my face and hands. (p.5)

私は自分の部屋に戻ってドアを閉めると、顔と手を洗い、石鹸とブラシを使って列車の煤煙をこすり落とした。棚には手で刺繍したタオルが一列並んでいたが、私はそのひとつを取り、顔と手を拭いた。

（筆者訳）

列車の煤煙は、リチャードが染まった、都会の汚れた価値観の象徴となっており、グレチエンが自ら刺繍したタオルによって彼が清められることから、グレチエンの果たす役割が暗示されている。

Presently still in silence, he got up and moved through the doorway. His huge shadow fell upon Gretchen and me as he stood there momentarily before going inside. I turned and looked towards him but, even though he was passing from sight, I could not keep my eyes upon him. (p.8)

やがて彼は、やはり黙ったまま立ち上がり、玄関の奥に入って行った。彼が中に入ろうとして、玄関にさしかかった瞬間、彼の巨大な影がグレチエンと私を包んだ。私は振り返り彼の方に目を向けたが、後ろ姿を見送っているというのに、彼を見つめていることができなかった。

（筆者訳）

リチャードとグレチエンを包む巨大な影は父親の愛の象徴であるが、それはまた温かい川がそこに住む者に及ぼす影響の結果ともいえ、人間を慈しみ育てる川そのもの象徴でもある。リチャードは父親の後ろ姿を直視できないが、直視できないのが顔ではなく後ろ姿であることから、父親の存在そのものに無意識のうちに畏怖の念をいだき、それまでの価値観と新たな価値観との葛藤が始まっていることがわかる。

Somewhere below us, along the bank of the river, an express train crashed down the valley, creaking and screaming through the night. Occasionally its lights flashed through the opening in the darkness, dancing on the broad green river like polar lights in the north, and the metallic echo of its steel rumbled against the high walls of the mountains.

Gretchen clasped her hands tightly over my hand, trembling to her finger tips.

"Richard, why did you come to see me?"

Her voice was mingled with the screaming metallic echo of the train that now seemed far off. (p.8)

眼下の谷間のどこかを川岸に沿って、急行列車が轟音とともに下り、車両のきしむ音が闇を切り裂いた。時折列車の灯りが闇の中の木立の隙間からチラチラと洩れ出して、極北のオーロラのように大きな緑の川面に踊り、鉄の車輪が放つ金属音がそそり立つ山々にこだまして轟いた。

グレチエンは両手で私の手を強く握ったが、指先まで震えていた。

「リチャード、なぜ私に会いに来たの。」

彼女の声は、もう遠くに行ってしまったらしい列車の、悲鳴のような金属音のこだまと重なった。

（筆者訳）

轟音とともに谷を下る列車は都会の価値観そのものである。リチャードが今まで染まっていたその価値観が金属音の絶叫とともに去ってゆく様は、神との戦いに敗れた悪魔が金切り声をあげて逃走する姿を連想させる。その意味では、父親もグレチエンも神の遣いとしての役割を担っていることになる。

With her hands in mine I held her tightly. Suddenly I felt something coming over me, a thing that stabbed my body with its quickness. It was as if the words her father had uttered were becoming clear to me. I had not realized before that there was such a love as he had spoken of. I had believed that men never loved women in the same way that a woman loved a man, but now I knew there could be no difference. (p.10-11)

彼女の手を握ったまま、私は彼女を強く抱きしめた。突然私は何かに襲われたような気がした。それは素早く私の体をぐさりと刺していった。彼女の父親が言った言葉がはっきりわかってきたかのようであった。今まで私は、彼が言ったような愛が存在するとは思っていなかった。男が女を愛する愛し方と、女が男を愛する愛し方は全く違うと考えていたが、違いなどあり得ないことが今わかった。

（筆者訳）

父親の言葉はリチャードの価値観に深手を負わせ、リチャードは新たな価値観に目覚め始める。それは彼の愛が、貪るだけの獣的愛から慈しむ愛へと変化する兆しである。

When it was time for us to go into the house, I got up and put my arms around her. She trembled when I touched her, but she clung to me as tightly as I held her, and the hammering of her heart drove into me, stroke after stroke, like an expanding wedge, the spears of her breasts. (p.11)

私たちが家の中に入る時間になると、私は立ち上がって彼女の体に両腕を回した。私が触れると彼女は震えたが、私が抱きしめるのと同じくらい強くし

がみついてきた。すると彼女の心臓が、鼓動する度に、とがった乳房を楔のように私に打ち込んできた。
（筆者訳）

グレチエンのとがった乳房は楔のようで、既に父親の言葉によって深手を負ったリチャードの傷口に食い込んでくる。楔が丸太の裂け目に食い込んで真っ二つに裂くように、リチャードの価値観は父親とグレチエンの価値観にさらされて真っ二つに裂けてしまうのである。

I closed the door softly and went back to my room. There I found a chair and placed it beside the window to wait for the coming of day. At the window I sat and looked down into the bottom of the valley where the warm river lay. As my eyes grew more accustomed to the darkness, I felt as if I were coming closer and closer to it, so close that I might have reached out and touched the warm water with my hands. (p.14)

私はドアをそっと閉めると自分の部屋に戻った。そこで椅子を見つけて窓辺に置き、朝が来るのを待った。窓辺の椅子に腰をおろして、私は温かい川が流れる谷底を覗きこんだ。目が暗闇に慣れるにつれて、私は自分がだんだん川に近づいているかのように感じた。手を伸ばせば温かい水に触れることができると思えるほど近くにである。
（筆者訳）

朝を待つリチャードが谷底を覗きこんでいて陥る錯覚は注目に値する。人間の目は、見る物を判別しがたいほど極めてかすかな光のもとでは、ふと遠近感を失ってしまうことがある。すなわち、遠くの物が近くにあるかのように見えることがある。作者はこの現象を描くことによって、リチャードと川との心理的距離が縮まったことを巧みに表現している。吊り橋を渡る時には恐怖の対象だった川が、手を伸ばせば温かい水に触れることができると思えるほど近くに感じられたのである。

“I did say last night that I was going back early this morning, Gretchen, but I didn’t know what I was talking about. I’m not going back now until you go with me. I’ll tell you what I mean as soon as breakfast is over. But first of all I wish you would show me how to get down to the river. I have got to go down there right away and feel the water with my hands.” (p.15)

「今朝早く帰るつもりだと確かに昨夜は言ったよ、グレチエン、でも自分でも言っている事がわかっていなかったんだ。僕はもう君といっしょでなければ帰らない。朝食がすんだらすぐ、僕が何を考えているのか君に話すつもりだ。でもまず、あの川まで下りてゆく道を教えてもらえたらと思うんだ。どうしても今すぐあそこまで下りて行って、手であの水に触れてみたいんだ。」
（筆者訳）

リチャードが川の水に触れたいと思うのは好奇心からであるが、彼の好奇心を引き起こす原因はその川が冬でも温かく、その温かさが無言のうちに住む人々を包み、川が人々から愛されていることにある。リチャードは人々と川との関係に、人々と神との関係を見出し、自分もまた川の影響力によって価値観が一変したように感じたのである。

註
テキストは『Warm River And Other Stories』南雲堂 1984 を使用。本文引用はすべてこの版からであり、ページ数は、引用に続けて括弧に入れて示す。